

マルトゥによるペルシャ湾交易参入

—前3千年紀～前2千年紀初頭文献史料・考古資料に基づく考察—

堀岡 晴美

The mar-TU and Persian Gulf Trade: Administrative/Economic Documents and Archaeological Evidence of the Third and Second Millennium BC

Harumi HORIOKA

前2050年前後に南メソポタミアでは家畜集積・再分配センターが設置され、同じ頃バハレーン島では城塞都市が出現してディルムンの首都となる。また一時途絶えていたメソポタミア～ディルムン間交易の復活も見られる。遠く離れているにもかかわらず両地域でマルトゥが活動していることから、これらの出来事にはマルトゥがなんらかの形で関わっていたと推測される。本稿では、メソポタミア南部とバハレーン島におけるマルトゥの活動について、またペルシャ湾交易との関わりについて、前3千年紀半ばから末期に至るまでの楔形文字史料と若干の考古資料に基づいて考察する。

キーワード：マルトゥ、ディルムン、ペルシャ湾交易、バハレーン島、プズリシュ・ダガン

This paper proposes the following three scenarios based on administrative/economic documents and archaeological evidence of the third millennium and the early second millennium BC. First, in about 2050 BC, a fortified city appeared on Bahrain Island and became the capital city of the Dilmun. Conversely, in southern Mesopotamia, Puzriš-Dagan was also established by the mar-TU. The Dilmun also reappeared in the economic texts of the Ur III period. These events must have been related. Second, it seems that there was collaborative relationship between the mar-TU on Bahrain Island and the mar-TU who inhabited the swampy coastal regions of the Persian Gulf. Third, the immigration of the mar-TU from the western region to participate in trading of the Persian Gulf had already begun by the mid-third millennium BC.

Key-words: mar-TU, Dilmun, Persian Gulf trade, Bahrain Island, Puzriš-Dagan

はじめに

古代ディルムン (Dilmun) 文明は、メソポタミア文明とインダス文明を結ぶペルシャ湾交易の中継地として栄えた¹⁾。その名は紀元前4千年紀からメソポタミアの楔形文字史料に現れ、それ以降ペルシャ湾交易権を独占していた事が史料から推察される。ところが前2200年頃から、ディルムンに言及する文書の数に極端に減少し、替わって交易相手としてマガン (Magan) の名が文書に登場する²⁾。ディルムンが再びメソポタミア文献に見られるようになるのは150年以上も経ってからであった。

ディルムンが文献史料に復活した時期は、ディルムンに比定されるペルシャ湾内のバハレーン島 (Marchesi 2014: 50–51) に城塞都市が出現した時期とほぼ重なる。この頃からディルムンは繁栄期 (「ディルムン文明期」) に入る

が、それ以前のバハレーン島は人口希薄な島でしかなかった。やがて前2200年頃からアラビア半島内陸部で半農半牧畜を営んでいたマルトゥ (mar-TU) が移住し、彼らが定住したことでバハレーン島は発展への道筋を辿ることになる³⁾。この事実は、かつてのデンマーク隊による調査と (Højlund 2007)、現在進められているワーディー・アッサイル (Wadi as-Sail) 古墳群発掘調査により明らかにされつつある (安倍ほか 2017)。

一方この頃のメソポタミア南部における注目すべき出来事として、ウル第3王朝が経営する家畜集積・再分配施設プズリシュ・ダガン (Puzriš-Dagān) の建設 (前2054–2052年頃) が挙げられる⁴⁾。この施設では多数の異国人が国外からの家畜の搬入や国内での搬送に従事し、その中には多くのマルトゥがいた (Buccellati 1966)。ディルム

ンの名が文献史料に復活した際にも、マルトゥがディルムンから悪魔祓い師 (maš-maš) を伴ってやって来たことと記されている⁵⁾。

同じ頃にプズリシュ・ダガンとバハレーン島で建設された施設は、700 km 以上も離れているにもかかわらず双方ともマルトゥとの関わりが見られる。しかも悪魔祓い師を連れてメソポタミアに現れたマルトゥは、メソポタミア〜ディルムン間を往来していた可能性がある。

本稿では、メソポタミア南部のプズリシュ・ダガンとバハレーン島のディルムンを何らかの形で結びつけるマルトゥが存在したこと、双方の施設自体にも関係性があったことを明らかにし、さらにその関係性が生じた原因について考察する。

なお本稿では、シュメール語文献に見られる MAR.TU については mar-TU と翻字し「マルトゥ」と仮名表記する。アッカド語文献での *amurru* については煩雑になることを避けここでは用いない。

ウル第3王朝時代の年代については M. モリナ (Molina) が示すおよそ前2110年〜前2003年に従う (Molina 2015)。また、ウル第3王朝の各王の治世年を記す際に、王名を次のように略す。シュルギ Šulgi = Š、アマルスエン Amar-SUEN = AS、シュ・シン Šu-Sin = ŠS、イビ・シン Ibbi-Sin = IS。

1. 前3千年紀後半

1.1. バハレーン島

古代ディルムン文明の領域について今日では、北は現在のクウェートから南はカタール半島に至るまでのアラビア半島東部沿岸一帯と、沖合のタルート島 (Tarut Island)・バハレーン島を含む地域と考えられている。前3千年紀のメソポタミアの史料からはディルムンが当時のペルシャ湾交易権を独占していた様子が窺えるが、この頃のディルムンの中心はタルート島にあった (安倍ほか 2017: 11)。その期間はおよそ前2650年から2350年までの間で、出土した土器や各種工芸品などからメソポタミア南部都市 (とくにラガシュ [Lagaš]) との交易関係が明かされる。またオマーン半島産容器やイラン産のクロライト製容器が大量に発見されたことで、オマーン・イラン方面との密接な関わりも確かめられる (Laursen and Steinkeller 2017: 15-16)。

しかし前3千年紀末にバハレーン砦に城塞都市が出現した頃、ディルムンの中心はすでにタルート島からバハレーン島に移っていた⁶⁾。安倍雅史の墓制研究によれば、バハレーン島では積石塚古墳を用いており、土坑墓を用いるタルート島とは決定的な違いがあると言う (安倍ほか 2017: 10-11)。このことからバハレーン島のディルムンとタルート島のそれとは文明の担い手が異なると考えざるを得ない。だがメソポタミアでは双方を区別することなく「ディルムン」と呼んだ。この地名は、メソポタミアから見て南

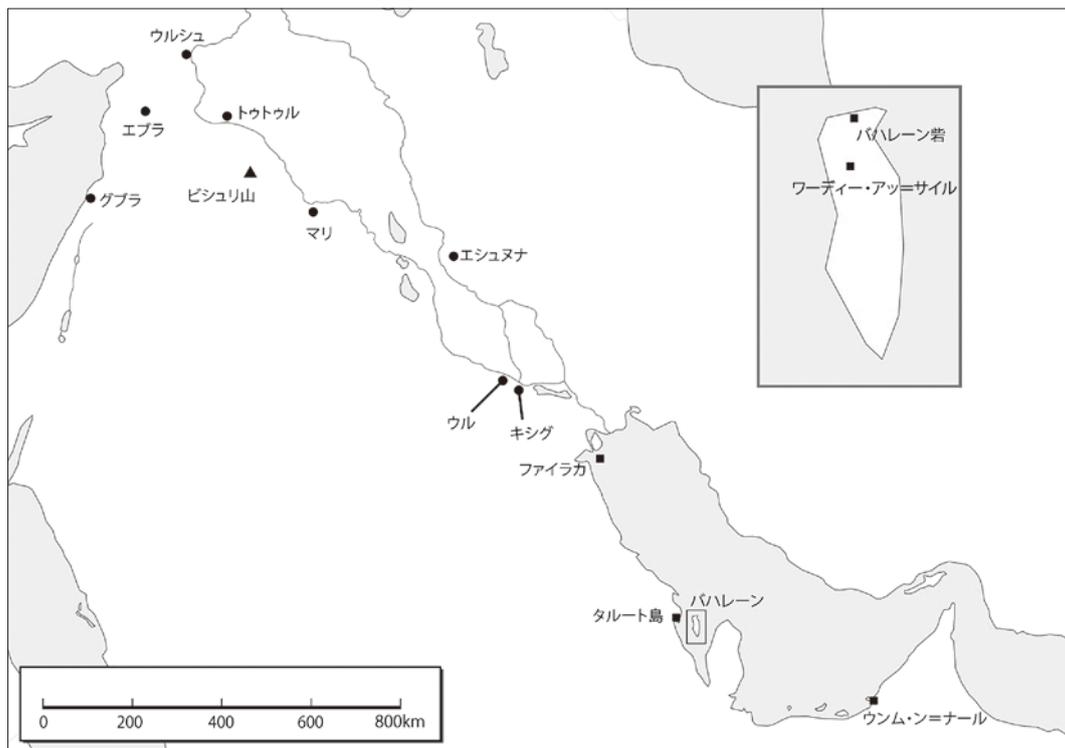


図1 前3千年紀〜前2千年紀 シリア・メソポタミア・ペルシャ湾岸都市・遺跡

東方向にあるペルシャ湾西岸一帯の広い地域を指すためにメソポタミア側が用いた呼称である。

バハレーン島の北部海岸には真水が湧く泉が点在しており、バハレーン砦もそのような入り江に隣接する。前3千年紀後半から居住が始まり (Højlund and Andersen 1994: 1)、市壁が建設される前から数々の建物と銅の加工場が設置されていた (Højlund and Andersen 1994: 370-381)。都市として整備される契機となったのは、ウム・アン＝ナル文明 (Umm an-Nar culture) からの植民であると後藤健は考える (後藤 2015: 159-162)。この文明は前2800年頃から前2200年頃までの間オマーン半島内で栄えた。その中心は現在のアブ・ダビ市 (Abu Dhabi, アラブ首長国連邦) の沖合に浮かぶウム・アン＝ナル島 (Umm an-Nar Island) にあり、メソポタミア・イラン・インドスとの交易中継地として栄えた。後藤はこの推論を、バハレーン砦から出土するウム・アン＝ナル式土器の占める割合と、ウム・アン＝ナルに特徴的な塔墓形式の古墳がバハレーン島にも僅かながら見られることを根拠にして導きだし⁷⁾、また植民の目的については、交易の便を図るためにウム・アン＝ナル島よりもメソポタミアに近いバハレーン島を選んだ、と説明する (後藤 2015: 156-163)。たしかに銅を産出しないバハレーン島では銅の精錬加工技術を独自に生み出すことは難しかっただろう。一方、銅鉱山を擁するオマーン半島では、早い時期から銅の精錬・加工技術が開発されていたに違いない。そうであればウム・アン＝ナル島からの技術移転は、バハレーン砦が城塞都市になる以前からすでに設けられていた銅加工工場の操業が開始された頃だろう。

それではバハレーン砦は、文化的に一歩先んじたウム・アン＝ナルからの植民者によって運営されたのだろうか。バハレーン砦から出土する土器の割合は、最古層から繁栄期に至るまで現地生産のバルバル (Barbar) 式土器が大部分を占める (後藤 2015: 158, 163)。この土器の製作者はバハレーン島住民のマルトゥで、彼らは移住したのち豊富な真水を利用した農業と牧畜業・漁業を組み合わせ定住生活を送り、豊かな島へと発展させた (Olijdram 2016: 1)。その過程で階層社会も生まれている (安倍ほか 2017: 6-7)。バハレーン砦の遺構は一部が発掘されただけで行政施設の全体像はまだ明らかにされていないが、交易品を保管したとみられる貯蔵庫数基があり、周囲を囲む市壁は防御のために建設されたと見られている (Højlund and Andersen 1994: 466-476; 後藤 2015: 160-161)。ただし護るべき対象は交易品だけではないだろう。銅加工に従事するウム・アン＝ナル植民者もまた、武力に長けた在地のマルトゥに護られたのではないだろうか。バハレーン砦はマルトゥとウム・アン＝ナル系の

人々との共同経営であったと筆者は考えている。

バハレーン砦を現代の研究者は「首都」と位置づけるが (たとえば Højlund 2000: 59)、そこには次のような理由があると G. マルケージ (Marchesi) が述べている (Marchesi 2014: 50-51)。古バビロニア期 (前2003年～前1595年) のシュメール語文学作品「エンキとニンフルサグ」で、後半に挙がる「ディルムン (の国) Dilmun」(Enki and Ninhursaga ETCSL 1.1.1, 280) とは別に、ニンシキラ女神 (^dNin-sikila) が父であるエンキ神 (^dEnki) から賜った「都市ディルムン Dilmun uru」が前半部分には登場する (Marchesi 2014: 31)。ディルムン市は各地からさまざまな物品がもたらされる交易の中心地として描かれている (Marchesi 2014: 49A-49P)。現在知られているディルムンの都市と言えるような遺跡は、バハレーン砦と、ほかに前2千年紀初めにクウェートのファイラカ島 (Failaka Island) に建設されたディルムンの出張所があるのみであるから (後藤 2015: 163-172)、バハレーン砦を首都と称することに問題はないだろう。

1.2. ウル第3王朝期ディルムン交易

ウル第3王朝を樹立したウルナンマ (Ur-Namma) は、首都ウルで神殿・ジックラト造営や運河掘削など、王朝の基礎固めに邁進し、経済活動に関してもマガンとの直接交易権を掌握し活発化させた。年名には次のように記されている。

Ur-Nammu E3/2 1.1.17 (Frayne 1993: 16)

「昔の事柄が (再びナンナ神のために) 存在するようになり、海の対岸の、ki-SAR-a へ彼は交易権を到達させマガンの船を彼 (ナンナ神) の手に戻した。」⁸⁾

ここで昔の事柄に戻したと表現された背景には次のような経緯がある。アッカド王朝開祖のサルゴン王 (Sargon) はメルッハ (Meluhha)・マガン・ディルムンと直接交易をおこなったと碑文に誇らしげに記している (Frayne 1993: 28)。その後アッカド王朝が滅亡するとメソポタミア南部はグティウム (Gutium) の支配するところとなるが、グティウムは文献史料を残さなかったため、ペルシャ湾交易についての情報がほとんど見つからない。因みにワーディー・アッ＝サイル古墳群もこの時期に相当する。しかし幸いなことに、グティウム支配期と並行するラガシュ第2王朝 (前2200年～前2100年) の後半に湾岸交易が継続されていた事実を、グデア王 (Gudea) の碑文から知ることができる。

30点以上あるグデア碑文の中でも (Edzard 1997: 29-180)⁹⁾、とくに円筒碑文 A (Cylinder A) にはメルッ

ハ・マガンを含む周辺地域との活発な交流の様子が記されている。

Gudea E3/1.1.7.CylA (Edzard 1997: 78)

- xv 8) かれらの山から(下りてきた) マガンとメルッハは(グデアのために) 木材を肩に担いだ。
- 11-12) (ニンギルス神は) ニンザガ神に命じ、彼(ニンザガ神) は彼の銅をあたかも大麦を灌ぐかのように大量に(グデアにもたらした)。
- 15-16) (ニンギルス神は) ニンシキラ神に命じ、彼女(ニンシキラ神) は巨大なハルブの木、黒檀、「海の木」を(グデアにもたらした)¹⁰⁾。

ここで引用した8行目と15-16行目はラガシュが木材などを輸入したメルッハ・マガンに言及する部分である。この2か所には、さらに円筒碑文 A 全体においてもディルムンは見られないのだが、11行目のニンザガ神(^dNin-zaga) をディルムンの神インザク神(^dInzak) の別名とする見方があり(Al-Nashef 1986: 343)、それが正しければ11行目は「ディルムンから大量の銅がグデアにもたらされた」と解釈しなくてはならない。しかし、この部分の解釈は難しく判断が付きかねる。

グデア碑文全体を見渡しても、ディルムンは彫像碑文 D (Statue D) に1回だけ「マガン、メルッハ、グビン、ディルムンの山は木を供給する」と記されるが、記載順からしてディルムンは末席になる。

対照的にマガンはグデア碑文中に8例あり(彫像碑文 A, B, C, D, E, G, H, K)、先の円筒碑文 A を合わせるとディルムンの9倍の頻度で碑文に記されたことになる。グデア治世下のラガシュの交易相手としてマガンがディルムンを凌いでいたことは明白である。

ウルナンマがマガン交易権を掌握するに至るまでには、おそらくマガン交易で優位に立っていたラガシュから交易権を奪い取る必要があったに違いないのだが、両者間の争いに関する記録は文献史料に残っていない。

ウル第3王朝期のディルムン言及文書は9点で(Edzard and Farber 1974: 157-158)、その数はマガンの4分の1以下と少ない。マガンに関しては第2代シュルギから第5代イビ・シンの治世時まで万遍なく認められ(Edzard and Farber 1974: 113-115)、その内容も木材・葦・銅・マガン固有の動物(オリックス、アヒルの一種)の輸入、マガン船やマガンの人に関する記録である(表1参照)。一方ディルムンの物品取引記録は王朝末期の2例しかな

い¹¹⁾。

ディルムン言及文書9点のうち日付を確認できるものは6点あるが(CST 254; Ebla 1975-1985, 287; TSU 305; UDT 92; UET 3, 672; UET 3, 1507)、これらはすべて王朝半ばのAS2年以降になる。

- CST 254 「ディルムンから(ウルへ) やってきたマルドゥと悪魔祓い師を饗応するために肥育ヒツジ1頭を膳所へ(支出した)。」¹²⁾ AS2年第6月3日
- TSU 305 「同上 肥育ヒツジ2頭を膳所へ(支出した)。」 AS2年第6月4日
- Ebla 1975-1985, 287 「同上 肥育ヒツジ1頭と成獣肥育牡ヤギ1頭を膳所へ(支出した)。」 AS2年第6月8日

第6月は収穫を祝うアキティ祭(a₂-ki-ti)が開催される月で、国の内外から都市支配者・上級役人・上級神官が祭りに参加するために多数やってくる。悪魔祓い師はメソポタミアにもいるが、わざわざディルムンから招かれたということは、この年のアキティ祭でディルムンの悪魔祓い師に関わるなんらかの特別な儀礼がおこなわれたということだろう¹³⁾。

AS8年第12月29日付けのウシ・ヒツジ・ヤギ引き渡し文書(UDT 92)にも、受領者として裏面5行目に「ディルムンの人」(人名記載なし)が見られる。王朝最後となる第5代イビ・シン治世1年(前2026年)には、「多色の羊毛300kgをディルムンへ向けて船に積んだ」という記録がある(UET 3, 1507, 3)。

AS8年のディルムン人を記す経済文書にも数行離れた位置にマルトゥが見られる。両人は同日に同じ役人から家畜を支出されているので何らかの関係性があったと見られる。ウル第3王朝期のディルムン言及文書は4点と数が限られているにもかかわらず、そこではすべてマルトゥとディルムン人が共に記されることから、ディルムンの再登場にはマルトゥがなんらかの形で関わっていたと推測される。

メソポタミアの初期王朝期(前2900年~前3千年紀半ば)からアッカドのサルゴン王朝期(前3千年紀半ば~前2200年頃)まで、ディルムンがメソポタミア~ペルシャ湾岸間交易を独占していたことはすでに述べたが、その後ウル第3王朝期半ばに至るまで、文献史料の上ではペルシャ湾交易から後退したように見える。その背景にはどのような出来事があったのか、またウル王朝は、なぜアマルスエン治世時になってから再びディルムンと接触するようになったのであろうか。

表1 デイルムン・マガン言及文書（前3千年紀後半メソポタミア文献史料より）

		デイルムン	マガン	
前 2350 年	Sargon			アッカド王朝開始
	Sargon	デイルムン船	マガン船	
	Maništuš		マガン遠征	
	Naram- ^d Sin		マガンの君主マニを捕える	
	Šarkališarri	(タマネギを) デイルムン船に		
前 2200 年頃				ラガシュ第2王朝開始
				バハレーン砦に銅工房
	Gudea St.A		マガンの山から閃緑岩	
	G. H. K			
	Gudea St.B		マガンの山から閃緑岩	
	Gudea St.C		マガンの山から閃緑岩	
	Gudea St.D	デイルムンの山から木	マガンから木	
			マガンの丘陵から閃緑岩	
	Gudea St.E		マガンの山から閃緑岩	
	Gudea Cy.A		マガンが山から下りてくる	
	Gudea Cyl.A		マガンが山から木を担いで来る	
前 2111 年	Ur-Namma			ウル第3王朝開始
	Ur-Namma		(年名)「マガンの船を戻した」	
前 2065 年	Š 28 年		「マガンの王」(人名)から黄金?	
	Š 39-41 年			ブズリシュ・ダガン建設
前 2050 年				バハレーン砦に城塞都市
				ナブラヌム・マルトゥ登場
	AS 1 年		マガンの人へ大麦	
	AS 2 年	デイルムンから (来た) マルトゥと悪魔祓い師	マガンの人へ大麦・穀粉	
	AS 4 年		オリックス	
	AS 4 年		マガンのエンシの使者	
	AS 5 年		マガン船舟大工へ大麦支給	
	AS 8 年	デイルムンの人		
	ŠS 2 年		マガンの人へ葦	
	ŠS 6 年		マガンの人へ羊毛	
	ŠS 9 年		マガン向け大麦	
	IS 1 年	デイルムンへ羊毛の船荷		
	IS 2 年		マガン向け船荷 銅購入用	
	IS 4 年		マガンタマネギをナンナ神殿へ 1/10 税として	
	IS 4 年	デイルムン石製円筒印章	マガン銅購入用衣類各種	
	IS 15 年		マガン葦	
	IS 15 年		マガン葦	
	IS 15 年		マガン葦	
	IS 17 年		マガン葦	(年名)「南のマルトゥの 「山」が 服従した年」
前 2020 年頃				イシンのイシュビ・エラ独立
				イシン第1王朝開始
前 2003 年	IS 24 年			ウル第3王朝終焉

1.3. プズリシュ・ダガン

前節では、一時途絶えていたディルムンへの言及がウル第3王朝期半ばに復活した事実を示したが、ディルムンが再び見られるようになったのはプズリシュ・ダガン文書である。

プズリシュ・ダガン（現ドゥレヘム Drehem）とは、シュメール・パンテオンの最高神であるエンリル神（^dEnlil）の聖都ニップル（Nippur）近くに設けられた、国家が経営する家畜集積・再分配センターの名称である。沖積平野周辺の丘陵地やステップから搬送されてきた家畜を一時的にこの施設に収容し、そののち神殿・役所・王室へ分配する。再分配は主にニップルの諸神殿に対しておこなわれた。だが王朝最後のイビ・シンが即位してまもなく機能を失ったようである。

「ダガン神の保護下へ」を意味するプズリシュ・ダガンというアッカド語名称には、ユーフラテス河中流域一帯の最高神ダガン神 ^dDagān の名が取り入れられている。ダガン神はシリアの神であるから、シュメール・パンテオンでは外来神であり低位の神となる。そのためウル第3王朝期の文書にダガン神の名は僅かしか見られない。またこの神に因む人名を持つ者はメソポタミア南部で商業的・行政的な活動をするシリア人である（Feliu 2003: 48）。

周辺地域から送られてくる大量の家畜を異国の神の保護下に集積するという一見奇異に感じられる施設名である

が、同じような趣旨で命名されたと思われる施設がウンマ領域内にある。「シャーラ神の保護下へ」を意味する「プズリシュ・シャーラ（Puzriš-Šāla）」という名称にはシャーラ神の名が取り込まれている。シャーラ神はウンマの都市神シャラ（^dŠara）とは別神格の、古バビロニア期マリ文書にダガン神の妻と記される神で（Schwemer 2008）、したがってここでも外来神である。この施設については詳細が不明のため、プズリシュ・ダガンのように周辺地域からの家畜の集積・再分配施設であったかどうかは分からないが、ザラベルゲルはおそらく（ウル王室の）王妃の施設であるとする（Sallaberger 2006: 125）。

1.4. ウル王朝とシリア

本節では、ウルの王族が経営する家畜集積所という重要な施設に、外来神の名を冠した理由について考察を進める。

ウル第3王朝は北メソポタミアとイラン方面へ頻繁に遠征した。遠征がこの方面に限定されていた理由についてこれまでは、シリアにいたマルトゥが東方に移動し、その後彼らがウル王室に敵対したためと考えられてきた。だが本稿で扱うナプラーヌム・マルトゥー族はシリアに本籍があり、ウル王室とは敵対するどころか協力関係にあったのである。

ウル王室は対外政策として周辺国と姻戚関係を結び、それにより同盟関係を築いていった。同盟国の一つであるマ



図2 前3千年紀～前2千年紀 メソポタミア南部都市・遺跡

リ (Mari, 現 Tell Harīri) は、イラク国境に近いユーフラテス河中流域の右岸に位置し交易の中継地として栄えた都市で、河川輸送と砂漠を経由する陸路の両方を支配する事ができる立地にあり、前3千年紀半ばに最初の隆盛期を迎えた。一時期アッカド王朝に屈するが、その支配から脱してからは350年にわたってシャッカナック (*šakkanakku*, マリの都市支配者称号) 王朝が続くのである¹⁴⁾。メソポタミアの編年で言えば、アッカド期後半からウル第3王朝期を経てイシン・ラルサ期 (前2003年頃~前1750年頃) までの期間に相当する。シャッカナックの支配力が強大であったことは当時の神殿建築事業を見れば明らかで、第4代ヌール・メル (Nūr-Mer) がニンフルサグ神殿 (E₂-Nin-hursag) と「高テラス」を、第5代イシュトゥップ・イルム (Išṭup-Ilum) が父イシュメ・ダガン (Išme-Dagan) のためにシャル・マーティム (Šarru-mātim) 神殿を、第7代アピル・キーン (Apil-kīn) が Sahuru (語義不明) を建設した。

ウルナンマはアピル・キーンの娘タラーム・ウルマ (Tarām-Urma) を息子のシュルギの妻に迎え、それによりウル~マリ間同盟が締結された (Boese and Sallaberger 1996)。マリはメソポタミアから見ればシリアの入り口にあたる。ウルは王朝の早い時期にマリの協力を得たことで、西方シリアからの圧迫を受けることなく東方・北東方への遠征に専念できた。タラーム・ウルマはシュルギに嫁いだのち次代の王アマルスエンの母となり、その結果彼女とマリから付き従った随臣の一団はウル王室の中で一大勢力を成すようになる (Sallaberger 1999: 159-161; Frayne 1997: 235-236)。シリアの神ダガンの信仰もこの結婚によってウル王室の内部に取り入れられたのだろう。マリとの同盟関係は王朝末期まで揺るぐことなく継続されたと考えられる。J. ベーゼ (Boese) と W. ザラベルゲル (Sallaberger) によれば、死後のアピル・キーンはウル第3王朝の故王たちと同等の形で死者供養を受けており、これはアピル・キーンが王朝の祖先の1人として当時ウル王室内で認識されていた事を示唆する (Boese and Sallaberger 1996: 27-30)。

西方と良好な関係にあった事で、ウル第3王朝期にはユーフラテス河中流域に位置するエブラやマリ、果ては地中海沿岸のグブラ (Gubla) からの使者や役人たちが再三メソポタミア南部を訪れている。彼らは移住者ではなく往来しているのである。

2. ナプラーヌム・マルトゥ

2.1. マルトゥの首領

マルトゥについては「都市を荒らす野蛮な遊牧民」「ウル第3王朝滅亡の元凶」といったネガティブなイメージば

かりが独り歩きしていたが、1966年にG. ブッチェラティ (Buccellati) がマルトゥに関する研究成果を発表して以来 (Buccellati 1966)、都市に敵対するマルトゥとは正反対の、都市と協力関係にあるマルトゥの存在が知られるようになった。

メソポタミア南部へ移住したマルトゥは都市住民から「敵対者」と見られる事なく、都市行政府から定期支給を受け、遠方へ使者として赴くスッカル職 (*sukkal*) や武人 (*lu₂-ge^{es}tukul*) として働いた。中には高額な支給を受ける者もいれば、低額支給者の女性マルトゥ集団も見られる (Buccellati 1966)。マルトゥは本来故地では、ヒツジ・ヤギの群れを連れ、季節に応じて長距離を移動する移牧を営んでいたのだが、移住後の南部都市で牧畜業に従事した様子はなく、羊毛生産や織物業にも関わってはいない (Sallaberger 2014: 108)。移動能力と武力を備えたマルトゥは、メソポタミアの周辺地域から家畜を搬送する仕事や王の使節などに携わった¹⁵⁾。

UDT 92で「ディルムンの人」とともに記されるマルトゥはその名をナプラーヌム (Naplānum) と言い、彼の場合、名前の後にはつねにマルトゥの肩書きが付く。ナプラーヌム・マルトゥはŠ 43年に初めてプズリシュ・ダガン文書に現れ、以後20年にわたり間断なく文書に記録され続ける。その数は現在知られるだけで84点あり (Fitzgerald 2002: Appendix 2)、ウル第3王朝期マルトゥ言及文書の4分の1以上を占める。言及回数が多いだけでなく、複数のマルトゥが記載される文書では必ず彼らの先頭におかれ、支給される家畜の数も多い¹⁶⁾。このような事からナプラーヌムはマルトゥを束ねる首領であったと考えられる。

P. ミカロウスキ (Michalowski) はナプラーヌムを「傭兵」の長と見なし、軍隊も擁していたと推測する (Michalowski 2011: 107-108)。事実、マルトゥには *aga₃-us₂* (近衛兵) の肩書きを持つ者が多いが、ナプラーヌム本人にその肩書きは見られない。ニップルに住居を有し、妻・子供・従者を含む一族はペルシャ湾頭沼沢地の町キシグ Kisig (現 Tell al-Lahm) に居住していた (Steinkeller 2004: 38)。ナプラーヌムはウル王のニップル詣でも同行し、さらに王族の女性を妻に迎えた可能性も指摘されるほどウル王室とは密接に関わっている (Buccellati 1966: 338-339, fn. 98)。

すでに述べたようにナプラーヌムには常に「マルトゥ」の肩書きが付され、妻・息子・従者にも「マルトゥ」が名前のあとに見られる。すなわちナプラーヌム一族はメソポタミア南部に拠点を築き勢力を拡大し、ウル王室とも密接な関係を維持してはいるが、けっしてメソポタミアの都市民とはならず、マルトゥであり続けたということだろう。

2.2. キシグ

キシグに居るナブラヌムに言及する文書はAS 8年の1点のみだが (Jones et al. 1961: text 104: 6-7)、キシグからウルへやってきたマルトゥの記録や、息子のイリ・バブム (Ili-babum) がキシグに近いウルで活動した記録 (IS 2年) があるので (Steinkeller 2004: 38, fn. 61)、一族はウル第3王朝期末までこの地に居住したと考えられる。ナブラヌムの息子シュルギ・アビ (Šulgi-abi) が大量の穀粉・ビールを船に積み込んだ記録があり、スタインケラーはこれらの船荷はキシグに送られたとした。またナブラヌムに大量の大麥が贈り物として送られていることも合わせて、ナブラヌムが高い地位を維持していた証拠と考え、一族はキシグに広大な土地を保有していたと推測する (Steinkeller 2004: 38, fn. 64)。

ニップルに邸宅がありながらナブラヌムはなぜキシグにも居住したのだろうか。さらに言えば、この地を拠点にしたことと一族が発展できた原因との間に因果関係はあったのだろうか。ウル第3王朝期には海岸線の後退はすでに始まっており、ウルは海港として機能しなくなっていた。荷の積出港として、あるいは湾岸からの荷揚げ港として、沼沢地帯にあるキシグが新しい公的な海港として整備されたとしても不思議はない。

キシグは1960年にTh. ジェイコブセン (Jacobsen) により、ウルの南西38kmの地点にあるアル＝ラハム遺跡 (Tell al-Lah(a)m) に同定された¹⁷⁾。1918年にR. キャンベル・トンプソン卿 (Sir Campbell Thompson) が発掘し、中央マウンドで初期王朝期の大型建造物を発見した。このマウンドはカッシート期 (前16世紀初頭～前12世紀半ば) まで居住され、その後の新アッシリア・新バビロニア期の居住区は中央マウンドの外側にある。出土品としてはウル第3王朝期アマルスエンと新バビロニア期ナボニドス (Nabonidus) のレンガ碑文があり、そのほかには土器類が出土した。墳墓は前2千年紀後半から新バビロニア期後半にかけてのものである (Safar 1949)。

しかしながらアル＝ラハム遺跡発掘からナブラヌム一族がキシグに居住した証拠は見つからなかった。20世紀初めの発掘調査であったことと、沼沢地帯であるため遺跡の残存状態が必ずしも良好ではない点が災いしたに違いないが、しかしこの一帯にマルトゥの居住地が広がっていた事は1960年代のエリドゥ (Eridu, 現 Tell Abu Shahrain) 周辺踏査により、アル＝ラハム遺跡の南西側にウル第3王朝期後半に始まる遺跡が多数発見された事で確かと言えるだろう (Oates 1960: 50; Zarins 1992: 67-68)。ウル第3王朝期末期のウル王朝が衰退し始めた時期に、沼沢地帯には自立したマルトゥの政治的組織体が成立していたことを、IS 17年の年名が物語っている¹⁸⁾。

ウル王朝滅亡後 (前2003年)、つづくイシン・ラルサ王朝期はデイルムン交易全盛の時代で (Oppenheim 1954; Leemans 1960)、メソポタミア文献史料には「デイルムン商人」の交易活動が数多く記されている。その中にはマルトゥも少なからず含まれている。対照的に地名マガンは文献上から姿を消した。このことは、バハレーン砦からウンム・アン＝ナル系の人々の存在が消えたことを意味するのかもしれない。

2.3. ナブラヌム・マルトゥの故地

G. ヤング (Young) が1992年に発表した粘土板 Wabash 1は、メソポタミア南部へ移住する前のナブラヌムの出身地について情報を提供する。ナブラヌム・マルトゥを先頭に、つづいてエブラ (Ebla) の人イリ・ダガン (Ili-Dagan)、ウルシュ (Uršu) の人ブドゥル (Budru)、マリ (Mari) の人イシュメ・ダガン (Išme-Dagan) へのヒツジ引き渡し文書である (Young 1992: 179)。ナブラヌムには配送先として「kur mar-TU」と添え書きがあるので、この時 kur mar-TU にいたか¹⁹⁾、あるいはこれからその地までヒツジを連れて移動するかどうかだろう。つづく3人はユーフラテス河中流域にある都市からやって来た者であるから、ナブラヌムも行く先は同じ方角のユーフラテス河中流域だろう²⁰⁾。

出身地を知るための情報源がもう1点ある。ナブラヌムをラルサ王朝開祖のナブラヌムと同一人物とする見方である。B. ランズベルガー (Landsberger) が1924年に、ラルサ王朝開祖のナブラヌムと、プズリシュ・ダガン文書で頻繁に言及されるナブラヌム・マルトゥとを同一人物と見なした (Landsberger 1924: 237, fn. 6; Steinkeller 2004: 37, fn. 55)。だがブッチェラティは両者の繋がりの可能性は低いとしている (Buccellati 1966: 319-320)。この論争はまだまだ決着がついていないが、前者に賛同する研究者は多い (たとえば Steinkeller 2004: 37, fn. 55; Fitzgerald 2002: 25; Porter 2012: 299; 堀岡 2013: 70-71)。ウル王室との協力関係を強化するいっぽうでマルトゥとしての部族集団は維持しつつ、富を築いていった首領の名はマルトゥの子々孫々まで語り継がれたことだろう。

ラルサ王朝後半、第13代ワラド・シン (Warad-Sin) (前1834年～前1823年) と第14代リム・シン (Rim-Sin) (前1822年～前1763年) の父クドゥル・マブク (Kudur-mabuk) は、自らを“ad-da/abu Ja-/Emutbala”「エムートゥバルの父」そして“ad-da kur mar-TU”「マルトゥ国の族長」と称した。ad-da/abu は「父」と「族長」の意味がある。プズリシュ・ダガンのヒツジ引き渡し文書にアビ・アムティ (Abi-amuti) という名のマルトゥが見られる。本人・妻シャート・シュルギ (Šat-Šulgi) ・マルトゥ、つづい

て3人のマルトゥへそれぞれヒツジを渡した記録で、受け取り手の先頭にこの名前がある (TRU 267, Buccellati 1966: 79)。アムティとはヤムートゥバルの省略形で、アビ・アムティは「ヤムートゥバル部族の族長」の意味であるが、ここでは受け取り手の名前替わりに使われている。ブッチェラティはシャート・シュルギがナブラヌムの妻であるとして、したがってアビ・アムティはナブラヌムを指すと考えた (Buccellati 1966: 338-339, fn. 98)。この見方が妥当であるか否かはさらなる検討が要求されるが、しかしナブラヌムがヤムートゥバル部族である事は事実で、その証拠にナブラヌムの従者の1人がヤムートゥバル部族を名乗っている²¹⁾。

人名アムティはエブラ文書(下記4.3)で言及されるアムティ (Amuti) と同名で、エブラでは「マルトゥ国の王 lugal mar-TU^{ki}」と「ビナシュ (ビシュリ山, Jabal Bishri) の王 lugal Binaš」の両方を名乗る (MEE 7 Testa 46, vii 9; rev. i 3-5)。これらの事実に基づき、次のような経緯があったのではないかと推測される。すなわちシリアの地でアムティがヤムートゥバル部族の名祖となり Abi-Amuti と称されるようになった後に、その称号を引き継いだナブラヌムがメソポタミア南部へ移住したということではないだろうか。アムティはビシュリ山 (ビナシュ) の支配者でもあるので (Archi and Biga 2003: 25; 堀岡 2010: 46-47)、マルトゥ国とビシュリ山は間違いなく近い位置にある。上記の Wabash 1 に記されたナブラヌムの行き先とは、メ

ソポタミア南部からユーフラテス河中流域へ向けて遡行した先の、ビシュリ山近くにある都市 kur mar-TU^(ki) である²²⁾。ただし、ナブラヌムを含むシリアからの役人たちは、この時メソポタミア南部のズリシュ・ダガンあたりから船出してはいるが、ユーフラテス河中流域のマリの上流・下流付近は峡谷内を急流が蛇行する地帯であるから、舟での遡上は難しい。上流へ向かうには下船し、砂漠のワーディーを利用するか河に沿ったステップ内に行く陸路で向かったと思われる。

ビシュリ山そのものをマルトゥの故地に見立てる意見が少なからずあるが、これに対して J. ザーリズ (Zarins) は、実際のマルトゥの故地は中央シリアから北東サウジアラビア内の、メソポタミアに面して弧を描くように広がる地域である、と異を唱える (Zarins 1986: 236)。しかしながら活動範囲を問題にするならザーリズの意見は妥当であるが、経済活動の拠点として考えた場合、「王 (en と lugal)」や「商取引を担当する「都市の長老 (abba₂)」」がいるビシュリ山近くの都市 kur mar-TU^(ki) が、シリアの役人たちと共に出かけたナブラヌムの行く先として相応しいだろう。

ワーディー・アッ=サイルの古墳に形式が類似した積石塚古墳の分布域は、北方はパルミラ (Palmyra) 周辺とビシュリ山南西のジャバル・ムハンマド・イブン・アリ (Jabal Mohammad Ibn Ali) その他の古墳から、バハレーン島に近いアラビア半島沿岸のダンマーム・ドーム (Dam-

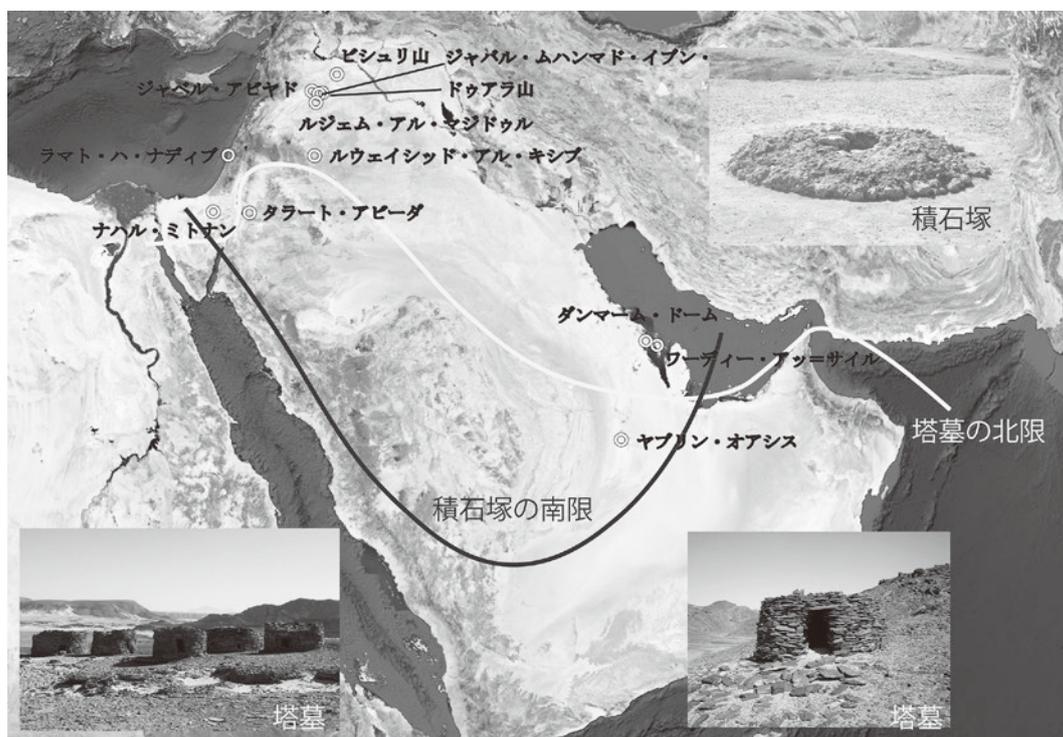


図3 積石塚と代表的な塔墓の分布 (安倍ほか 2017: 図8より引用)

mam Dome) とヤブリン・オアシス (Jabrin Oasis) の古墳群まで広がる (図3参照)。その分布域内に移牧を営む同質の部族集団が居住し活動していたわけだが、彼らは「井戸ネットワーク」という移動システムを構築したことで広域移動を可能にしたと言われている (Buccellati 2008: 153)。

3. ベルシャ湾交易への進出

3.1. ラガシュ

前3千年紀半ばに年代づけられるテル・ファラ (Tell Fara) 出土文書とラガシュ (現 al-Hiba) 文書にマルトゥへの言及があり、マルトゥのメソポタミア南部への浸透はこの頃にはすでに始まっていたと言える。さらに留意すべきは、これら2か所のアーカイヴにはディルムンに関わる文書も存在する点である。

ラガシュでは前2500年頃にウルナンシェ (Ur-Nanše) 王朝が開始された。ウルナンシェは関連する碑文が30点以上ある都市支配者であるが、その中に「マルトゥの水路」を記す1点がある。

Ur-Nanše 31 E1.9.1.31 (Frayne 2008: 116-117)

i 1) [u]r:^dnan[še]ii 1) e-da-sa[la₄]-2) mar-d[u₂] 3) mu-du₃...

D. フレイン (Frayne) 訳

i 1)[U]r-Nan[še]ii 1-3)built the wester[n] channel at the side of Sa[la]/ channel at the side of S[al] (against) the Amorites.

フレインは「アムル (に立ち向かう) 西の水路をウルナンシェが造った」と訳し、アムル (マルトゥ) の前に 'against' という語を括弧付きで補った。しかしこの文章のどこにも、そしてウルナンシェの王碑文すべてにおいても、マルトゥを敵対視する表現は見あたらない。フレインもマルトゥに対する先入観からこのような訳にしたのだろう。ここでの 'against' は不要で「ウルナンシェはマルトゥの水路を造った」とすべきである。また「マルトゥの橋 Duru_x[?]-mar-TU(-ne)」も行政経済文書に見られる (RTC 70 i 2, Nik 1, 42 ii, Marchesi 2006: 24, fn. 98)。

ウルナンシェの出自は明らかになっていない。孫の第3代エアナトゥム (Eanatum) にはルンマ (LUM-ma) という別名があり、それは GIR₃GIR₃ 名であると碑文には記されている²³⁾。GIR₃GIR₃ とはマルトゥの一部族ティドゥヌム (Tid(a)num) の書き方の一つ、あるいは戦闘名と見方が分かれるが、もし前者であるなら、ウルナンシェの王統はティドゥヌムの一員ということになる (Marchesi 2006: 24-26)。ウルナンシェ王朝の王たちも、そしてこの

時期の文書中の人物にもマルトゥの肩書きを持つ者はいないため、ウルナンシェがティドゥヌムではない可能性もあるが、「マルトゥの水路」「マルトゥの橋」の存在はマルトゥとの関わりがあったことを示唆する。

ウルナンシェはディルムンとの交易にも着手した。彼の碑文にはラガシュにディルムン船がやってきたと記されている²⁴⁾。ウルナンシェから5代下ったエアナトゥム2世と並行する時期、ラガシュには別の王統が成立していたが、その支配者ルーガルアンダ (Lugalanda) の治世時にもディルムン交易が盛んであった。

3.2. ファラ

マルトゥの活動はファラ文書にも記録されている。エスルアガ・マルトゥ (Esur'aĝĝa mar-TU) が²⁵⁾、ファラ文書 WF 78 に現れるが、およそ140人への大麦支給記録の中で、船乗りのリーダーと船乗りたちが一括りにされた第2セクション (40人) に、船乗りに挟まれるようにして配置されている。置かれた位置から一見船乗りのように見えるが、大麦支給量は船乗りの6倍もあり、おそらく責任ある任務として輸送物資の管理か輸送船の護衛にあたったのだろう。

ファラ文書には人名のあとに「ディルムン」の肩書きが付く人物が5人いる。彼らがディルムン人であるか否かについては確かめる事はできないが、一説に「ディルムン船の船大工」と言われている (Marchesi 2014: 52)。しかし海岸から数十キロ奥まったファラの地で造船に従事していたとは考えにくい。SLNU×ŠUŠ (船舶用ネット) と ninni (船舶用備品) の支給記録10点の中の3点に「ディルムン」と表示された人物へのネットや船舶備品が大量に支給されているので (TSS 627; 752, WF 142)、ファラにおいては船大工の彼らもまた河川輸送に携わっていたのだろう。前4千年紀ウルクⅢ期の職名リストには「ディルムン徴税吏 (DILMUN.ZAG)」(W 19948 ほか) があることから、船上に積んだ貢納品や戦利品をネットで覆い輸送したとは考えられないだろうか。

以下に引用する WF 142 では、受給者3人が名前ではなく職名で示されている。2、3番目はディルムン職の長とその息子で、それぞれ S. ネットを支給されたとある²⁶⁾。

WF 142

i 1-4) SLNU×ŠUŠ 1200点と ninni 1200点をジウデいの君主配下の都市支配者へ

i 5-ii4) SLNU×ŠUŠ x点を神殿行政官配下の理髪職シュブル配下のディルムン職長へ

ii 5) SLNU×ŠUŠ 90点を kinda 職 (理髪職の1種) H. 配下のディルムン職長の息子へ (支給した)。」

第一項目は大量のネットと N. 船舶用備品がジウディ (Ziudi) の君主 (en) が治める領域内の都市支配者へ、ファラに置かれた行政府から支出されたとある。ジウディの位置は明らかではないがメソポタミアでは en を戴く都市はキシシュとウルクだけであるから、この都市はメソポタミア外にある。遠方の都市から都市支配者が物資を受け取りに来たか、あるいは運んできたと解釈されるが、しかしディルムン職の 2 人の行き先が同じであったかどうかは分からない (堀岡 2017)。ファラ文書の中にはディルムンへ向けて穀粉を船積みした記録があるので (TSS 881, Cripps 2013)、ファラとディルムン交易との関わりは間違いなくあったと言える。

ファラ遺跡は古代都市シュルツパク (Šuruppak, 現 Tell Fāra) に同定されている (Krebernik 1998: 238)、ここから出土した 1000 点近い粘土板はシュルツパクの都市行政を記録しているのではない。F. ポンポニオ (Pomponio) と G. ヴィシカート (Visicato) はファラ行政経済文書の内容を詳細に研究し、1994 年出版の書物で次のような結論を明らかにしている。「初期王朝期 (前 2900 年頃～前 2350 年頃)、メソポタミア南部では河川輸送を円滑におこなうために諸都市間で協力しあう都市同盟が結成された。ファラ文書に記される都市同盟は、ウルク (Uruk) を宗主とするニップル・アダブ (Adab)・シュルツパク・ウンマ・ラガシュの 6 都市で構成される」というもので、ポンポニオはこの同盟を 'Hexapolis-league' 「6 都市同盟」と名づけた (Pomponio et al. 1994: 10-20)。ヴィシカートはさらに続けて、「シュルツパク都市行政の枠外に「同盟運営本部」となる e₂-gal (文字通りには「大きな家」) をシュルツパクの地に設置し、遠隔地交易をおこなった」と述べている (Visicato 2001: 124)²⁷⁾。ファラ遺跡からは大型のサイロ 32 基が発見されており、これほどの数のサイロ群は都市の枠を超える大規模な人数の食料を賄うには十分な容量を備えたもので (Martin 2012: 341)、河川輸送同盟本部の存在を彷彿とさせる。E. クリップス (Cripps) がファラ文書には遠隔地との実際の交易活動が記されると指摘するように (Cripps 2013: 1)、メソポタミア諸都市やエラム地方、そのほかの地域との間を往来する多数の dam-kas₄ (役人)、dam-gar₃ (交易商人)、ga-eš₈ (遠隔地交易商人) が文書中に見られる (Cripps 2013: 3)。位置を比定できない都市名も複数記されているため (たとえば A-hu-ti^{ki}, Cripps 2013: 3)、「6 都市同盟」の河川輸送ネットワークが活動できる範囲がどこまで広がるのか現時点では確定できない。南方はディルムンまで及んでいたことは確かである (TSS 881 vii 2', Cripps 2013: 8, 14-15 参照)。シリアの北西部に位置するエブラ (Ebla, 現 Tell Mardīh) については、ファラから遠く離れた地であるにもかかわらず

ず両者には共通の語彙リストがあり (Cripps 2013: 14)、また「6 都市同盟」所属の都市名を並べて記す地名リストもある (Visicato 1989: 169)。このような事から「6 都市同盟」の輸送力はエブラまで及んでいたのではないかと推測されるのだが、しかし A. アルキ (Archi) が「エブラとの外交・経済的関係を維持する役割のマリ王の代理人」と説明する役人 maškim-e-gi₄ がファラ文書に散見されるので (Archi 1999: 147; Cripps 2013: 12-13)、「6 都市同盟」はマリとは直接交流しても、その先のエブラはマリを通しての間接交流だった可能性が高い。

3.3. エブラ

前 3 千年紀半ばのエブラは傘下に多数の都市が服属する強大な都市国家であった (Astour 1992: 51)。羊毛の一大生産地であり、東西南北に通じる街道が連結する要衝でもある。

エブラの王宮 (Palace G) からは 15000 点ほどの粘土板が出土しているが、これらはおおよそアッカド王朝開始前からアッカド王朝初期までの期間に作成されたもので (Astour 2002: 77)、金属・木材・織物や衣服のほか、物資の支出記録が大変多い。なかでも、エブラ所属のエリートが遠方へ出向く際に支給される諸費用の支出など、旅行用の支出が多数記録されている点はエブラの特徴の一つと言えよう。旅行が商用目的か、はたまた軍事遠征であるのか、そのような目的についての記載はほとんど見られない。

エブラ王宮の役人／高官や他都市のエリートたちの移動、または徴収された労働者集団の移動の記録が数多く見られるが (Astour 1992: 36-51)、これらはシリア内での移動を記したもので、メソポタミア南部へ移住した証拠はむしろメソポタミアの文献に見いだせる。

アッカド期文書に地名として「エブラの岸 (gu₂-Ebla^{ki})」が見られ (Astour 1992: 12, fn. 48)、ウル第 3 王朝期の AS 5 年以降からウンマにある「エブラ運河 (i₇-Ebla)」が文書に登場してくる (Astour 1992: 12, fn. 51)。これはエブラ運河の岸にあるネルガル (^dNergal) 神殿の労働者をリストアップした記録で、ŠS 4 年には「エブラ運河」の岸に生えていたナツメヤシの木 13 本を運び出した記録もある²⁸⁾。これらを見ればメソポタミア南部に「エブラ」という名の場所が存在していた事は明らかで、シリアからメソポタミア南部への移住があったと推測される。H. サウレン (Sauren) は、この「エブラ運河」はエブラの聖所へ繋がると述べているが (Astour 1992: 12)、中継地を経由しての繋がりでだろう。またトランスティグリス (Trans-Tigris) では「エブラ砦 (Dūr-Ebla)」という地名も知られており (Astour 2002: 65, fn. 57)、エブラがかなり広範囲に交易ルートを伸長させ、居留地を建設したこと

が分かる。

ウル第3王朝期のウンマには都市支配者が経営する羊毛工場があった。ザラベルゲルの説明によれば、ある年のウンマ文書からヒツジを種類別に算出したところ、「シュメールヒツジ」49%、「太尾ヒツジ」44%、「黒色ヒツジ」7%という割合になった。(Sallaberger 2014: 104)。「シュメールヒツジ」とはメソポタミア南部都市住民が所有するヒツジで、「太尾ヒツジ」は異国からの移住牧畜業者が沖積平野周辺の丘陵や山岳地帯から連れてくる種類で、その羊毛はシュメールヒツジよりかなり高価なものである。太尾ヒツジとシュメールヒツジとの割合がほとんど変わらない状況を鑑みれば、ウンマでは現地人に混じってかなりの数の移住者が羊毛産業に関わっていたと言える。移住者はシリアだけでなくエラム方面からもやって来たが、ウンマに関しては「エブラ運河」があるので、エブラおよびその周辺都市から移住してくる牧畜業者が多かったに違いない。

前3千年紀半ば、シリア北部のハブル(Habur)河中流域で牧畜業の革新が興り、ヒツジ・ヤギ飼養が専門的な産業へと発展する(Wossink 2009: 111-114)。A. ウォシンク(Wossink)の説明を借りれば、経営者が専従の牧人を雇い、それにより頭数の増加と移動距離の伸長が可能になったということである。羊毛は長期間の保管が可能であるため遠隔地への移送が容易であり、そのため格好の交易原資となる。アッカド期からウル第3王朝期にかけての上記のようなウンマの状況から、シリアからメソポタミア南部へのヒツジ飼養業者の移住があったことが確かめられ、羊毛はおそらく交易資本に使われたと考えられる。ペルシャ湾交易がさかんであったウルの文書では、ある年に生産された羊毛がヒツジ32万頭分であったという記述がある(Sallaberger 2014: 106)。ここでもシュメールヒツジと太尾ヒツジの両方が見られる。ほかにエラム地方から連れてこられるヒツジは「高地の太尾ヒツジ」と呼ばれた(Sallaberger 2014: 107)。羊毛は南部諸都市で刈り取られ、大量の羊毛がペルシャ湾交易の中心地ウルへ運び込まれた。

西方からメソポタミア南部への移住ルートについて明確に述べることは難しい。先に述べたように、ウル第3王朝期にはユーフラテス河中流域のウルシュ・マリや川筋から少し西方に離れるエブラからの使者が幾度となくメソポタミア南部へやってきている。彼らが辿った道筋が判明すれば、おそらくそれが移住経路を知る手がかりになるだろう。使者たちはマリまでは舟で航行してきたが、その先の急流地帯は砂漠内の陸路を使い、航行が可能となる地域に至ったところでユーフラテス河右岸のいずれかの都市から舟で下ったと考えられる。

ヒツジ飼養業者のメソポタミア南部への進出は、マルトゥウの移住を促す要因にもなった。

マルトゥウは羊毛ビジネスに携わることなく(Sallaberger 2014: 108)、輸送や護衛のためにヒツジ飼養業者や交易商人に付き添って移動したのである。それは先に示したファラ文書 WF 78 の中でエスラグ・マルトゥウの位置が sipa (羊飼い) や dam-gar₃ (交易商人) とは別枠の、船乗りの一団の中に置かれていることから分かる。

3.4. マルトゥウ剣

ところで考古学の分野からもエブラからメソポタミア南部へ移住があった事を証明する資料が見つかる。それはマルトゥウに製造法の起源があると考えられている「マルトゥウ剣」と呼ばれる短剣である(Astour 1992: 55, fn. 337)。以下に M. マイオッキ(Maiocchi)による「マルトゥウ剣」についての説明を要約して紹介しよう。

精緻を極めた工芸品マルトゥウ剣(gir₂ mar-TU)は、BAD gir₂ mar-TU(「マルトゥウ剣所有者」を意味する職名)と呼ばれる人々を介して、商人または使者により購入されエブラへ運ばれた。BAD gir₂ mar-TUはマルトゥウと接点があると言われている。マルトゥウ剣は実戦用ではなく儀礼などで使われる²⁹⁾。先端が弧を描く柄には装飾が施され、全体が青銅・銀・黄金製であったり、部分的に黄金などが使われたりとさまざまで、そのため値段も銀31.32gの安価な品から、銀994.41gの最高級品まで幅広い(Maiocchi 2010: 8-10)。

エブラ文書ではマルトゥウである人物に言及する文書は少ないが³⁰⁾、マルトゥウ剣の授受に関する記録は非常に多い。しかし、実物の出土例としてはエブラからは1点で(Maiocchi 2010: 2)、ほかに大理石象嵌にマルトゥウ剣を持つ人物を描いた図像がある(Maiocchi 2010: 2)。実物が残る例が少ない理由として、再利用のために鑄造され易いものであったことと、マルトゥウ剣の特徴がその柄の部分にあるため、刀身のみが残った場合はマルトゥウ剣と断定できないという事情があったと考えられる。

柄が三日月状にカーブする短剣は三日月状柄頭短剣(“lunate pommel dagger”)と呼ばれ、とくにレヴァントとアラビア半島から多く出土している。L. S. ニュートン(Newton)とザーリンズによれば、三日月状柄頭短剣は前2500年から前1500年の1千年ほどの間、アラビア半島のセム語を話す牧畜民の「地位標章(status markers)」となる武器であったという(Newton and Zarins 2000: 161)。バハレーン島からも2振り of マルトゥウ剣が出土した(安倍ほか 2017: 図12-2)。

エブラにおいてもマルトゥウ剣は、儀礼用備品などの用途のほかに、役人の地位の高低を表わす標でもあった

(Maiocchi 2010: 2, 11)。マルトゥ剣が王宮の廷臣たちの間を巡回している様子が数点の文献から確認できるのだが、それによると、高位の役人は昇進する毎に新しい地位に相応しい、より高価なマルトゥ剣を入手し、それまで持っていた剣を彼の地位を引き継いだ者に与えたということだ。装飾円盤と織物も同様の使われ方をしたが、こちらは僅かな例しか見つかっていない (Maiocchi 2010: 7, 11)。

エブラでは労働チームが派遣される際に短剣と容器が分配されたとアストゥールが述べるが (Astour 1992: 46)、そこでは 'daggers and vessels' としか説明しなかったため 'daggers' が「マルトゥ剣」であるのか、あるいは他のタイプの剣であるのか定かではない。しかしマルトゥ剣が旅の携行品であった事は次の例で明らかとなる。

TM. 75. G. 2240 : 「マルトゥ剣 1 振り、ブレスレット 1 個、銀 5 シェケルをドゥグラス Dugurasu へ旅する、イルムバルの息子ルシ・マリクの niġ₂-kaskal (のための支給)」³¹⁾ (Pomponio and Xella 1997: 104; Feliu 2003: 15, EB: T58, fn. 104)。

niġ₂-kaskal は「旅費」や「旅装」を意味するシュメール語で、ルシ・マリクは、何らかの用事でドゥグラス (位置不明) へ旅立つ際にマルトゥ剣をはじめとしてさまざまな品物を支給された。実戦には不向きなマルトゥ剣を携行する理由とは、行った先で地位を示す標章として使ったということであろう。

考古資料の中にもマルトゥ剣が地位標章である証拠がある。出土地不明ではあるが、トゥトゥル (Tuttul, 現 Tell Bī'a) の支配者の名を刻む青銅製三日月型柄頭短剣 (= マルトゥ剣) があり、銘文にはイレ・リム (Ile-Lim) に続いて「トゥトゥルの君主 (en tu-tu^{ki}-li)」とある。イレ・リムとはウル第 3 王朝期文書に現れるトゥトゥルの都市支配者 (ensi₂) Yaši-Lim と同一人物であるが³²⁾、むしろここで注目すべきは、剣の持ち主が都市支配者であること、すなわちマルトゥ剣が都市支配者のステータスを表す標章となっている点である。

マルトゥ剣のメソポタミアからの出土例として、ウル王墓 PG 755 (前 2400 年) 埋葬品の短剣 6 本の中の一つ、黄金製三日月状柄頭の短剣がある (Gabellone and Scardozzi 2007: 124) (図 4)。PG 755 からはメスカラムドゥ (Mes-KALAM-du₁₀) の名を記す黄金製容器が出土し、この墓はメスカラムドゥの墓とされた (Boehmer 1993: 83)。メソポタミアではマルトゥ剣の実物はほかに発見されていないことから、おそらくこのマルトゥ剣はメソポタミア以外の地で作製されたものである。神殿への奉納品や王宮への献

上品ではなく、墳墓の埋葬品であることを考慮すれば、被葬者本人が生前所有していた物であろう。この墓からは多数の黄金製品などが出土し、被葬者が至極裕福であったことは一目瞭然である。

メスカラムドゥはシュメール王名表に挙がるウル第 1 王朝開祖メスアネパダ (Mesanepada) の父として知られるが、メスカラムドゥ自身は王として王名表に載っている訳ではない。なによりも出土した容器 4 点に記されたメスカラムドゥの名前の後ろには称号がまったく記されていないのである³³⁾。Mes-KALAM-du₁₀ という名前は「良き国土の英雄」と解釈できるシュメール語であるから、元から南部の住人であったかもしれないが、移住先で現地語に合わせて改名する例はよくあることで、そのため次のような推論も成り立つのではないだろうか。すなわち、エブラ領内のいずれかの都市のエリート、あるいはエブラの高官が、エブラ王宮からマルトゥ剣を直接か間接的に賜わり、その後、南メソポタミアへ移住した可能性である。ウルは先に述べたようにペルシャ湾交易の中心地である。そこに葬られた裕福な被葬者は湾岸交易で財を成したに違いない。

マルトゥ剣を持つ男性像を描く円筒印章の印影が、ファラから 120 点以上出土した (Martin 1988: 244-312) (図 5)。類似品がウル王墓 (PG 1034)、エシュヌナ (Ešnunna) から 1 点ずつ、他に出土不明なものなど数点あるが (Newton and Zarins 2000: 159, Fig. 3)、ファラからの出土数は他を圧している。それはエブラまで伸びる物流ネットワークを運営する「6 都市同盟」の本部がファラにあっ



図 4 ウル王墓出土黄金製柄マルトゥ剣
PG 755 「メスカラムドゥの墓」
前 2400 年頃 約 31.2 cm
(Woolley 1934: pl. 152)

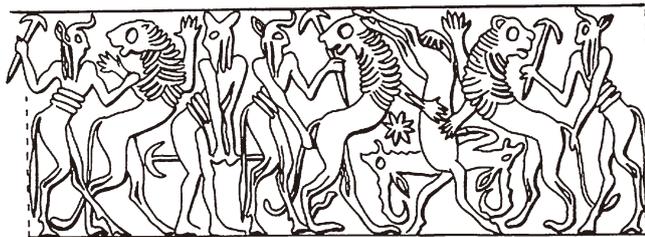
たからに他ならない。件の円筒印章図では、研究者から 'bull man' と名付けられた男性とマルトゥ剣がセットになるが、'bull man' がライオンを刺殺する場面にどのような意味合いが込められているのか分からない。先に挙げたエブラ文書の記述にあるように、マルトゥ剣が商用・軍事にかかわらず遠征の際に携行されるものであるなら、西方からメソポタミア南部へ到達した人々の所持品だったと考えられる。マルトゥ剣を描く円筒印章の所有者もユーフラテス河中流域のいずれかの都市からの移住者であろう。

「マルトゥ剣」の名称から、もともとはマルトゥが携行した短剣だったのではないかと考えられるのだが、この問題に関しては今のところ情報が得られない。

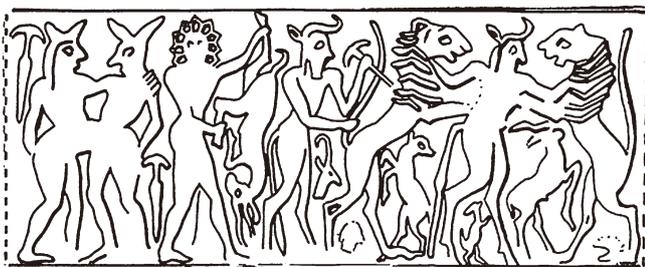
ファラ遺跡は1902年から03年にかけてドイツ隊が、少し間が空いて1931年にペンシルヴェニア大学が発掘した。円筒印章の印影はドイツ隊発掘の際に出土している。20世紀初頭の発掘のため出土地点に関するメモがなかったが、H. マーチン (Martin) の努力により遺物の3分の1ほどの出土地が再確認された (Martin 1988)。しかし大量の印影が出土した地点と、建築址や墳墓との関係性については一切報告がなされていない。



no. 250 (サイズ不明)



no. 256 (サイズ不明)



no. 260 (サイズ不明)

図5 ファラ遺跡出土円筒印章印影 前2600年～前2550年
(Martin 1988: 249, 252)

ファラには同一の図が多数見つかる印影がある。印影 no. 250 は同一図が44点あり、no. 256 は49点も見つまっている (図5)。これらの大半は同じ地点から出土しているが、2か所にわたる場合もある。このような円筒印章の持ち主は、穀物倉庫かあるいは何らかの貯蔵庫の管理者だったのではないだろうか。しかし先に述べたサイロの位置はすべて遺跡の北東部分で、印影の多くが出土した地点とは距離があり (Martin 1988: Fig. 5 参照)、両者の関係性については不明である。

ファラ出土語彙文書 SF 20 の中の gir_2 の項目には、 gir_2 mar-TU を含む4種類の剣/短剣が記されている。しかし他都市の同種のリストには、 gir_2 の項目はあっても gir_2 mar-TU はない³⁴⁾。ところが、エブラの語彙リストにはそれが記されているのである (MEE 3 45-46 viii: 1)。ファラの「6都市同盟」本部にはユーフラテス河上流/下流から物資輸送のため輸送人員を伴ったエリートが頻繁にやってきていた。円筒印章のマルトゥ剣を掲げる男性の図も、メソポタミア南部まで航行してくる都市支配者や監督クラスが持参した標章だったのではないだろうか。

そのように考える場合に障害となる問題がある。ファラのマルトゥ剣の図はほとんどが初期王朝期Ⅱ期 (前2750年頃～前2600年頃) に年代づけられる円筒印章の意匠であり、アッカド王サルゴン前後とされるエブラ文書とは年代的に開きがある。エブラ文書は比較的短期間に作成されたものであるから、文書が書かれたずっと以前から物資の交換やエリートの旅立ちなど行われていたであろう。したがって時間的なずれは問題とはならない。むしろ円筒印章の年代決定が1930年代のディヤラ地域調査で出土した円筒印章研究に基づくものであり、年代について再度見直す必要があるだろう。

おわりに

本稿では、前2050年頃にバハレーン島とメソポタミア南部で起きた出来事が、マルトゥの活動と結びついていたのではないかと推測から始まり、考察を進めた結果、次のような結論に至った。

第一に、プズリシュ・ダガンとバハレーン砦の城塞都市の共通点は両者が交易品の集積地であることである。プズリシュ・ダガンに集まるヒツジはまだ交易品とは言い難いが、剪毛作業を経て羊毛に替わる前段階の「交易品予備軍」の集積地と言えよう。バハレーン砦は「エンキとニンプルサグ」で語られるように異国の品々が集められ貯蔵される施設である。双方がほぼ同じ時期に建設された背景には、両者を結ぶ交易路の運営者の意図があった。運営者とはマリに後押しされるウル王室であり、マリ～ウル同盟の物流分野で利潤を得るナブラヌム・マルトゥの一族であ

る。前3千年紀半ばからヒツジ飼養業者によるペルシャ湾交易進出が顕著になり、羊毛を含む交易品の収集施設と物流システムの構築が進められた。前3千年紀半ばから末期までのマガンがペルシャ湾交易を牽引していた時期は、ブズリシュ・ダガン～バハレーン砦・ディルムン＝ラインの能力が十分発揮されない段階にあったのだろう。ウル王朝最後の王イビ・シン1年になると、ディルムンへ輸送される羊毛300kgの船荷に関する記述が見られるようになり(表1参照)、この頃に交易品集積施設と輸送分野の連携がうまく機能するようになったと考えられる。

第二に、イビ・シン17年年名に見られる南のマルトゥの「国」とは、おそらくペルシャ湾頭沼沢地を拠点に発展を遂げたナブラヌム一族とエリドゥ周辺に移住したそのほかのマルトゥの勢力を表している。マルトゥの活動が沼沢地で展開された理由は、ディルムン船が接岸できる波止場を設けるに適した立地だったからである。この地に居住し交易品輸送・交易船護送に従事したマルトゥは、ディルムンからのマルトゥと接触し連携するか、もしくは一体となって輸送にあたったと考えられる。両地域を往来するマルトゥの存在は、ディルムンから悪魔祓い師を伴いウルを訪れたマルトゥの記録から明らかである。

第三に、ナブラヌム・マルトゥが時折出向いた都市 kur mar-TU^(ki) がビシュリ山周辺にあることで、ナブラヌムの故地もおそらくその近辺にあったと考えられる。その位置はワーディー・アッ＝サイル古墳群と類似の積石塚古墳分布地域に内包されるので、ナブラヌム一族とバハレーン島のマルトゥの間には氏族としての繋がりがあった可能性がある。前3千年紀前半まではマルトゥはシリア砂漠・アラビア半島内陸で活動していたが、気候変動や牧畜業の革新などをきっかけに、彼らの一部は東に進んでメソポタミア南部へ、また一部は南のバハレーン島・ディルムンへ進出した。移住後ペルシャ湾頭とディルムンの両地域に定着したマルトゥは海上で連携し、ペルシャ湾の海上ルートを活動範囲内に取り込んだことでペルシャ湾交易の主役になったと考えられる。ただしナブラヌム一族に関連する墳墓が未発見な状況であるから、彼らの葬制を調査することが喫緊の課題となる。

謝辞

本論は、「バハレーン・ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト」歴史学担当メンバーとして、日本西アジア考古学会第22回大会にておこなったポスター発表原稿を修正し、内容を拡大して加筆したものである。本稿作成に際しては、本プロジェクト代表後藤健氏ならびにプロジェクトメンバー安倍雅史氏から、有益な史料を提供していただき貴重なご意見を賜った。また、査読者の方から適切な指摘を戴き、論文再構成の参考にさせて頂いた。この場を借りて感謝の意を表します。

註

- 1) 一般的に NI.TUK^(ki) と書かれるが NI.HUB₂^(ki) も少数見られる。正しい読みについてマルケージは、シュメール語では Delmun、アッカド語では Telmun とするが (Marchesi 2014: 50)、本稿では従来から使われてきた読み「ディルムン」を用いる。
- 2) 地名マガンはシュメール語文献では ma₂-gan^(ki) と書かれ、アッカド語では ma-kan, ma-ka-an である。オマーン半島に比定される (Heimpel 1988)。
- 3) シュメール語文献で使われる MAR.TU について以前は mar-tu と翻字されていたが、昨今では mar-du₂ と翻字する研究者が増えている。その理由は、TU の代わりに DU または DU₈ の文字を使うケースがあり、そのため文字 TU には tu のほかに du の音もあるとみなされたのである。しかしこの見方に対しつぎのような反論が可能である。ウル第3王朝期文書には MAR.TU を記す箇所が300以上ある (Buccellati 1960: 14) とは言うものの、筆者が知る限りでは DU を用いる例は前3千年紀半ばのファラ文書 (SRJ p.31 Rs. ii 7) ašag-mar-DU とウル第3王朝期より下のイシン・ラルサ期の文書 (Buccellati 1960: 170-171) にそれぞれ1例あるのみである (ファラ文書については下記3.2参照)。DU₈ はウル第3王朝期ニップル文書に1例あるが (Edzard 1989: 434)、この文字には du と tu の両方の読みがあるので mar-du₂ と翻字する根拠にはならない。ウル第3王朝期シュメール語文書において、DU よりも画数が多いにもかかわらず TU の文字が使われ続けた理由は、「マルトゥ」という語の発音が「マルドゥ」ではなく「マルトゥ」であったからではないだろうか。筆者のこの反論はまだ推測の域を出ないため、本稿では読みを決定せず TU と大文字で翻字しておく。
- 4) PUZUR₄^{†d}-da-gan^(ki) 「ダガン神の保護下へ」を意味するアッカド語の地名。ニップルの南約10kmのユーフラテス河沿いの都市。Š 39-41年に都市と施設 (Būt-Puzriš-Dagan 「ブズリシュ・ダガンの家」) が建設された。ブズリシュ・ダガン文書に見られるマルトゥについては Buccellati 1966 を参照。
- 5) 下記1.2参照。
- 6) 「バハレーン砦 (Qal'at al-Bahrain)」とはバハレーン島北部海岸にある16世紀のポルトガル砦が営まれた地で、この下には紀元前3千年紀に遡る古代ディルムン文明の都市遺跡が眠っている。
- 7) オマーン半島は、アラビア半島西部沿岸から南部までを包含する塔墓の分布地域に入る。図3および安倍ほか2017: 7-8参照。
- 8) Ur-Nammu E3/2 1.1.17 (Frayne 1997)
 - 11) ni₃-ul-li₂-a-ke₄ pa mu-na-e₃ 12) gaba-a-ab-ba-ka-ka
 - 13) ki-SAR-a nam-ga-eš₈ bi₂-sa₂ 14) ma₂-ma₂-gan šu-na mu ni-gi₄
- 9) グデアの碑文は数が多く、現在のところ彫像26点、円筒2点、円筒断片12点、そのほかレンガなどが100点ある。Edzard 1997を参照。
- 10) Cyl. A xv 8) ma₂-gan me-luh-ha kur-bi-ta gu₂ ġiš mu-na-ab-ġal₂
 - 11) ^dnin-za₃-ga-da a₂ mu-da-aġ₂
 - 12) urud-da-ni še-mah de₆-a-gim
 - 15) ^dnin-sikil-a-da a₂ mu-da-aġ₂
 - 16) ^{†is}ha-lu-ub₂-gal-gal ^{†is}esi ġiš-ab-ba-bi
- 11) IS 1年：ディルムンへの羊毛、IS 4年：ディルムン石製円筒印章 (表参照)。
- 12) mu mar-TU maš-maš Dilmun(-ta) e-ra-ne(-eš)
- 13) 収穫を祝う祭りであるから maš-maš 「悪魔祓い師」は耕地で宗教的儀式を執り行なったと考えられる。
- 14) GIR₃NITA₂ 「軍事的為政者」を意味するアッカド語。

- 15) たとえばプズリシュ・ダガン文書に見られる家畜移送については、Buccellati 1966: 275-277、ほかの職業については *ibid.* 339-344。
- 16) たとえば20人のマルトゥのグループの代表としてヒツジ5頭を支給される。Grégoire 1996: text Ashm. 924-547.
- 17) Jacobsen 1960: 183. 反対意見もある。
- 18) IS 18 年年名 $mu^d I_2-bi_2^d$ -SUEN lugal-uri^{ki}-ma-ra mar-du₂ a₂-im^{im}ulu₃ ul-ta uru^{ki} nu-zu gu₂ im-ma-na-na-ga₂-ar (Frayne Ibbi-Sîn E3/2.1.5) 「ウル王イビ・シンに対して、南の境にいるマルトゥ — (彼らは) 昔から都市を知らない— が服従した年」 「南の境」はウルよりも南方を表すので沼沢地帯と理解される。
- 19) シュメール語の kur は「山」「異国」を意味するが、シュメール語文献で使われる kur mar-TU は「国」に近い意味もあれば、移牧をおこなうマルトゥが一時的に集住する地を表す場合もあるため、本稿では kur mar-TU に日本語訳をつけずこのまま用いることにする。
- 20) この方向へ向けてナブラヌムが外向いた記録はほかにもある (Buccellati 1966: Appendix 2)。ただしヒツジの配達先が kur mar-TU であってもナブラヌムがそこにいた証拠にはならないとスタインケラーは反論し、さらにウル王朝遠征先の東方のハムリン盆地にも kur mar-TU があり、むしろこちらであろうとした (Steinkeller 2004: 40, fn. 68)。しかし筆者はこの見方に賛成できない。ヒツジを敵国へ送り届けることはないと考えられるからである。
- 21) Na-ap-sa-nu-um lu₂ kiĝ₂-gi₄-a Ia₃-a-ma-tum (TCL II 5508; Buccellati 1966: 245, fn. 58)
- 22) エブラ文書に見られる kur mar-TU^{ki} は王や高官が居る都市国家である (Archi 1985)。
- 23) E-anatum E1.9.3.5 v 10-14. Frayne 2008: 148.
- 24) Urn 20 15), Urn 34 iv 1), Urn 3 16), Urn 37 16) ma₂-dilmun.
- 25) 翻字は Marchesi 2006: 23, fn. 95 に準ずる。
- 26) i 1) 1200 SI(ma₂).NU × ŠUŠ 2) 1200 ninni₅ 3) ensi₂-GAR 4) en zi-u₄-di^{hi} 5) [...] SI(ma₂).NU × ŠUŠ ii 1) gal:dilmun 2) Šubur 3) šu-i 4) sanga-GAR 5) 90 SI(ma₂).NU × ŠUŠ 6) dumu gal:dilmun iii 1) HU.DUR.BU 2) kinda₂
- S. ネット = SI(ma₂).NU × ŠUŠ と N. 備品 = ninni₅ を記す文書は TŠŠ 369; 415; 424; 627; 736; 752; 969, WF 118; 142; 144. S. ネット、N. 備品ともどのような製品かは不明。
- 27) ヴィシカートはシュルツパクと「6都市同盟」による 'an economic joint venture' と表現する。
- 28) 労働集団についてはナラム・シンによるエブラからの強制連行である可能性も排除できない (Astour 1992: 12-13)。4580人の集団がある都市 (位置不明) へ移動した記録があるが、かれらは農業労働者のようである。ほかにも3600人あるいは3200人が集団で他都市へ移動する例があり (Astour 1992: 42)、この者たちは徴募された出稼ぎ労働者であろう。強制的に連行されているのではない。
- 29) 清浄儀礼や屠畜儀礼用に神殿へ奉納され、あるいは他都市の王族への贈り物などに使われる。その他の用途も含め、個々の事例については Pomponio and Xella 1997 参照。
- 30) マルトゥとは都市の枠外で活動する人々であり、エブラの都市民はたとえ畜産を生業としていたとしてもマルトゥの範疇に入らない。
- 31) TM. 75. G. 2240 obv. ii 10-iii 9) I ĝir₂ mar-tu 1 gu₂-li-lum 5 (gin₂) ku₃-babbar niĝ₂-kaskal Ru₁₂-š₂-ma-lik dumu-nita I₃-lum-bal DU.DU š₂-in Du-gu₂-ra-su^{ki} kur₆ ^(?)

- 32) メソポタミア南部の文書では都市支配者の称号は ensi₂ であるが、エブラ文書では各都市の支配者を en または lugal と称する。
- 33) マリから出土した奉納珠に刻まれたメスカラムドゥの碑文には「キシユの王 (lugal Kiš^{ki})」の称号が見られる (Edzard 1993: 82)。
- 34) アブ・サラビーク (Abū Šalābīkh) 出土語彙リスト OIP 99 No.34 は SF 20 の duplicate だが ĝir₂ の項目がない。摩耗した可能性もある。

略号一覧

- CST = T. Fish, 1932 *Catalogue of the Sumerian Tablets in the John Rylands Library*, Manchester.
- Ebla 1975-1985 287 A = Cagni L. (ed.) 1987 *Ebla 1975-1985, Dieci anni di studi linguistici e filologici*. Naples, Atti del Convegno Internazionale.
- MEE = Materiali per il vocabolario sumerico.
- MMA = Cuneiform Texts in the Metropolitan Museum of Art, New York
- Nik = Nikol'skij M. V. 1908 *Documenty chozjajstvennoj otčetnosti drevnejšej epochi Chaldei iz sobranija N. P. Lichaceva* [prä-sargonische Urkunden].
- OIP 99 = Biggs, R. 1974 *Inscription from Tell Abū Šalābīkh*. Chicago.
- RIA = *Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie*. Berlin-New York. Walter de Gruyter.
- RTC = Thureau-Dangin, F. 1903 *Recueil de tablettes chaldéennes*. Paris, E. Leroux.
- SF = Deimel, A. 1923 *Die Inschriften von Fara II: Schultexte aus Fara*, WVDOG 43. Leipzig.
- SRJ = Edzard, D. O. 1968 *Sumerische Rechtsurkunden des III. Jahrtausends aus der Zeit vor der III. Dynastie von Ur*. München, Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften.
- TM.75.G = Find siglum Tell Mardikh, Palace G.
- TRU = Legrain L. 1912, *Le Temps des rois d'Ur*: Paris, Champion.
- TSU = Limet H. 1976 *Textes sumériens de la IIIe dynastie d'Ur*: Musées royaux d'art et d'histoire.
- TŠŠ = Jestin R. R. 1937 *Tablettes sumériennes de Šuruppak: conserves au Musée de Stamboul*. Paris.
- UDT = Nies, J. B. 1919 *Ur Dynasty Tablets from Telloh and Drehem*. Leipzig.
- UET 3 = Legrain, L. 1937 *Business Documents of the Third Dynasty of Ur, Plates*. London.
- W = *Uruk-Warka* (Baghdad, Berlin), Signatur der Fünde.
- WF = Deimel, A. 1924 *Die Inschriften von Fara III: Wirtschaftstexte aus Fara*. WVDOG 45, Leipzig.

参考文献

- Al-Nashef, K. 1986 The Dieties of Dilmun. In H. A. Al. Khalifa and M. Rice (eds.), *Bahrain through the Ages: The Archaeology*, 340-366. London, Routledge.
- Archi, A. 1985 Mardu in the Ebla Texts. *Orientalia* NS 54: 7-13.
- Archi, A. 1999 The Steward and His Jar. *Iraq* 61: 147-158.
- Archi, A. and M. G. Biga 2003 A Victory over Mari and the Fall of Ebla. *Journal of Cuneiform Studies* 55: 1-44.
- Astour, M. C. 1992 History of Ebla (Part 1). In C. H. Gordon and G. A. Rendsburg (eds.), *Eblaitica: Essays on the Ebla. Archives and Eblaitic Language*, Vol. 3, 3-82. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Astour, M. C. 2002 History of Ebla (Part 2). In C. H. Gordon and G. A. Rendsburg (eds.), *Eblaitica: Essays on the Ebla. Archives and Eblaitic Language*, Vol. 4, 57-195. Winona Lake, Eisenbrauns.

- Boemer, R. M. 1993 MES-KALAM-DUG. B. *RIA* 8 1/2: 82-83.
- Boese, J. and W. Sallaberger 1966 Apil-kīn von Mari und die Könige der III Dynastie von Ur. *Altorientalische Forschungen* 23: 24-39.
- Buccellati, G. 1966 *The Amorites of the Ur III period*. Naples, Istituto Orientale di Napoli, Pubblicazioni del Seminario di Semitistica a cura di Giovanni Garbini, Ricerche I.
- Buccellati, G. 2008 The Origin of the Tribe and of 'Industrial' Agropotentialism in Syro-Mesopotamia, In H. Barnard and W. Wendrich (eds.), *The Archaeology of Mobility: Old World and New World Nomadism*, 141-159. Los Angeles, Cotsen Institute of Archaeology, University Of California.
- Cripps, E. 2013 Messengers from Šuruppak. *Cuneiform Digital Library Journal* 2013:003.1-21. https://cdli.ucla.edu/pubs/cdlj/2013/cdlj2013_003.html.
- Edzard D. O. 1989 Martu (Mardu). *RIA* 7: 433-440.
- Edzard, D. O. 1993 MES-KALAM-DUG. A. *RIA* 8 1/2: 81-82.
- Edzard, D. O. 1997 *Gudea and His Dynasty. The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods, Vol. 3/1*. Toronto, Buffalo and London, University of Toronto Press.
- Edzard, D. O. and G. Farber 1974 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes, Band 2: Die Orts- und Geässernamen der Zeit der 3. Dynastie von Ur*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert.
- Feliu, L. 2003 *The God Dagan in Bronze Age Syria*, translated by Wilfred G. E. Watson. Leiden and Boston, Brill.
- Fitzgerald, M. A. 2002 *The Rulers of Larsa*. A Dissertation Presented to the Faculty of the Graduate School of Yale University.
- Frayne, D. R. 1993 *Sargonic and Gutian Periods (2334–2113 BC). The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods, Vol. 2*. Toronto, Buffalo and London, University of Toronto Press.
- Frayne, D. R. 1997 *Ur III Period (2112–2004 BC). The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods, Vol. 3/2*. Toronto, Buffalo and London, University of Toronto Press.
- Frayne, D. R. 2008 *Presargonic Period (2700–2350 BC). The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods, Vol. 1*. Toronto, Buffalo and London, University of Toronto Press.
- Gabellone F. and G. Scardozzi 2007 From the Object to the Territory: Image-Based Technologies and Remote Sensing for the Reconstruction of Ancient Contexts. *Archeologia e Calcolatori Supplemento* 1: 123-124.
- Grégoire, J. -P. 1996 *Archives administratives et inscriptions cunéiformes: Ashmolean Museum Bodleian Collection Oxford. AICAB I, Les Sources I*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner S. A.
- Heimpel, W. 1988 Magan. *RIA* 7 3/4: 195-199.
- Højlund, F. 2000 Qal'at al-Bahrain in the Bronze Age, In the Ministry of Cabinet Affairs and Information of the State Bahrain and the Institute of Archaeology, University of London (eds.), *Traces of Oaradise: the Archaeology of Bahrain 2500BC–300AD*, 59-62. London, the Dilmun Committee.
- Højlund, F. 2007 *The Burial Mounds of Bahrain: Social Complexity in Early Dilmun*. Aarhus, Aarhus University Press.
- Højlund, F. and H. H. Andersen 1994 *Qala'at al-Bahrain Vol.1: The Northern City Wall and the Islamic Fortress*. Jutland Archaeological Society Publications XXX: 1. Jutland Archaeological Society. Aarhus, Aarhus University Press.
- Jacobsen, Th. 1960 The Water of Ur. *Iraq* 22: 174-185.
- Jones, T. B. and W. J. Snyder 1961 *Sumerian Economic Texts from the Third Dynasty*. Minneapolis, University of Minnesota Press.
- Krebernik, M. 1998 Die Texte aus Fara und Tell Abū Šalābīkh. In P. Attinger und M. Wäffler (eds.), *Mesopotamien: Späturuk-Zeit und Frühdynastische Zeit*, 237-427. Orbis Biblicus et Orientalis 160/1. Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht.
- Landsberger, B. 1924 Über die Völker Vorderasiens im dritten Jahrtausend. *Zeitschrift für Assyriologie und vorderasiatische Archäologie* 35: 213-238.
- Laursen S. and P. Steinkeller, 2017 *Babylonia, the Gulf Region, and the Indus: Archaeological and Textual Evidence for Contact in the Third and Early Second Millennia B.C.* Winona Lake, Eisenbrauns.
- Leemans, W. H. 1960 *Foreign Trade in the Old Babylonian Period Revealed by Texts from Southern Mesopotamia*. Studia et documenta: ad iura orientis antiqui pertinentia 6. Leiden, E. J. Brill.
- Maiocchi, M. 2010 Decorative Parts and Precious Artifacts at Ebla. *Journal of Cuneiform Studies* 62: 1-24.
- Marchesi, G. 2006 *Lumma in the Onomasticon and Literature of Ancient Mesopotamia*. Padova, Sargon.
- Marchesi, G. 2014 Tilmun (Dilmun). A. Philologisch. *RIA* 14, 1/2: 50-52.
- Martin, H. P. 1988 *Fara: A Reconstruction of the Ancient Mesopotamian City of Šuruppak*. Birmingham, Chris Martin.
- Martin, H. P. 2012 Šuruppak B. *RIA* 13: 336-347.
- Michalowski, P. 2011 *The Correspondence of the Kings of Ur*. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Molina, M. 2015 UR A. I. *RIA* 14, 5/6: 355-61.
- Newton, L. S. and J. Zarins 2000 Aspects of Bronze Age Art of Southern Arabia: The Pictorial Landscape and Its Relation to Economic and Socio-political Status. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 11: 154-179.
- Oates, J. 1960 Ur and Eridu: The Prehistory. *Iraq* 32: 32-50.
- Olijdam, E. 2016 Humble Beginnings? A Closer Look at Social Formation during Early Dilmun's Formative Phase (c. 2200-2050 BC). *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 46: 1-19.
- Oppenheim, A. L. 1954 The Seafaring Merchants of Ur. *Journal of the American Oriental Society* 74: 6-17.
- Pomponio, F. and G. Visicato with a contribution by A. Alberti 1994 *Early Dynastic Administrative Tablets of Šuruppak*. IUON Series Maior VI, Napoli.
- Pomponio, F. and P. Xella 1997 *Les dieux d'Ebla: Étude analytique des divinités éblaïtes à l'époques des archives royales du IIIe millénaire*. Münster, Ugarit-Verlag.
- Porter A. 2012 *Mobile Pastoralism and the Formation of Near Eastern Civilizations: Weaving Together Society*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Safar, F. 1949 Soundings at Tell Al-Laham. *Sumer* 5: 154-64.
- Sallaberger, W. 2006 Puzriš-Dagān. *RIA* 11 1/2: 125-128.
- Sallaberger, W. 2014 The Value of Wool in Early Bronze Age Mesopotamia. On the Control of Sheep and the Handling of Wool in the Presargonic to the Ur III Periods (c. 2400 to 2000 BC). In C. Breniquet and C. Michel (eds.), *Wool Economy in the Ancient Near East and the Aegean*, 94-114. Oxford, Oxbow Books.
- Schwemer D. 2008 Šāla. A. *RIA* 11 7/8: 565-567.
- Steinkeller, P. 2004 A History of Mashkan-shapir and Its Role in the Kingdom of Larsa, In E. C. Stone and P. Zimansky (eds.), *The Anatomy of a Mesopotamian City: Survey and Soundings at Mashkan-shapir*, 26-42. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Visicato, G. 1989 Fara ed Ebla: Nuove Prospettive Storico-politiche nel Periodo Protodinastico. *Oriens Antiquus* 28: 169-176.
- Visicato, G. 2001 The Organization of Ancient Šuruppak, In H. P. Martin, F.

- Pomponio, G. Visicato and A. Westenholz (eds.), *The Fara Tablets in the University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology*, 115-124. Bethesda, CDL Press.
- Woolley, C. L. 1934 *The Royal Cemetery: A Report on the Predynastic and Sargonid Graves Excavated between 1926 and 1931*, Published for the Trustees of the two Museums by the Aid of a Grant from the Carnegie Corporation, New York.
- Wossink, A. 2009 *Challenging Climate Change: Competition and Cooperation Among Pastoralists and Agriculturalists in Northern Mesopotamia (C. 3000-1600 BC)*. Leiden, Sidestone Press.
- Young, G. D. 1992 Appendix: Wabash 1 and a Note on Ur III Syria. In M. Chavalas and J. L. Hayes (eds.), *New Horizons in the Study of Ancient Syria*, 176. Bibliotheca Mesopotamica 25. Malibu, Undena Publications.
- Zahrins, J. 1986 MAR-TU and the Land of Dilmun, In H. A. Al. Khalifa and M. Rice (eds.), *Bahrain through the Ages: The Archaeology*, 233-250. London, Routledge.
- Zahrins, J. 1992 The Early Settlement of Southern Mesopotamia: Review of Recent Historical, Geological and Archaeological Research. *Journal of the American Oriental Society* 112/1: 55-77.
- 安倍雅史・上杉彰紀・西藤清秀・後藤 健 2017 「ワーディー・アッ=サイル古墳群から見た古代ディルムンの系譜」『西アジア考古学』18号 1-16頁。
- 後藤 健 2015 『メソポタミアとインダスのあいだ—知られざる海洋の古代文明』筑摩書房。
- 堀岡晴美 2010 「メソポタミア都市文明に貢献したマルトゥ」『若手研究者成果論集』36-61頁 科学研究費補助金特定領域研究「セム系部族社会の形成—ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究—」。
- 堀岡晴美 2013 「MAR.TU 敵視の背景」大沼克彦 (編) 『ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民』65-98頁 六一書房。
- 堀岡晴美 2017 「第58回大会発表要旨: Tell Fara 出土文書に見られる職名 dilmun」『オリエント』59巻2号 232頁。

堀岡 晴美

国士舘大学イラク古代文化研究所

Harumi HORIOKA

The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq,

Kokushikan University